

浄土

1979-3

昭和十年五月二十日 (第三編郵便物認可) 毎月一回一日発行
昭和二十四年四月二十八日 運輸省 (特別販賣承認雜誌) 第三二五号
昭和五十四年二月二十五日印刷 昭和五十四年三月一日発行
第四十五卷 第二号



佐藤良智博士追悼号

S. Kuz

「仏心者大慈悲是也」

—永遠のいのちをみる経(『観無量寿経』)より—

佐藤良智博士書



仏の慈悲を頂き、人を救い、人類より争いをなくし、
平和をもたらすものこそ、わたくしたちの永遠の願い
であります。仏の永遠の願いであります。

—『浄土』40巻6月号より再掲—

三月号



往生の行多しといえども、大
きに分って二となす。一は正
行、二は雑行なり。

——『選訳本願念仏集』

(定本法然上人全集1 P.20)

目次

追悼特集 佐藤良智博士を偲ぶ

良智君の憶い出……………佐藤密雄	…(3)
佐藤良智先生を偲んで	
—思いつくまま—……………静永孝英	…(6)
良智先生と顕浄会……………渋谷賢応	…(8)
園長先生さようなら……………佐藤良子	…(11)

法話

お彼岸におもう……………魚尾晃久	…(12)
------------------	-------

〈連載〉善導大師の生涯とその教え(4)

曇鸞大師……………	…(16)
-----------	-------

西行と仏教(二)

—生滅滅已・寂滅為楽—……………河野喜雄	…(24)
〈読者の声〉信仰への道	
『無量寿経』に説かれていること(四)……………吉村孝	…(32)

法然上人の弟子たち⑦

津戸三郎為守のこと〔三〕……………梶村昇	…(19)
浄土句集……………一田牛畝選	…(30)
〈表紙裏・巻頭言〉「仏心者大慈悲是也」……………佐藤良智	
念仏ひじり三國志⑨——法然をめぐる人々……………寺内大吉	…(37)

表紙 久住静雄画

カット 大正大学美術部

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

追悼特集 佐藤良智博士を偲ぶ

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

法然上人鑽仰会の創立以来の同人であられた、大正大
学名誉教授・文学博士佐藤良智先生が卒然としてご逝去
されたのは、昨晚秋、昭和五十三年十一月二十六日のこ



佐藤良智博士遺影

とであった。文京区小石川のご自坊光円寺は、境内に大
きな銀杏の老樹があり、巷間では銀杏寺として親しまれ
ているが、折しも秋風に黄葉を落とした老木が、泰然と
しながらも寂寥の風情を漂わせていたのは、あながち私
たちの愚かなる想いだけではない。“巨星墜つ”——も
ろ人にやるせない悲しみとなつかしき愁しみを残され
て、佐藤博士は西方浄土に往生されたのである。

月日の営みはまことに速く、もう今月は百ヶ日の忌日
を迎える。ありし日の博士の慈しみの眼差しを、今その
温顔なる尊容に偲んで、ここに静かに追悼のページを組
んだのである。インド仏教学の権威として、また卓抜な
教育者として、さらには正僧正司教勸学の高僧としての
佐藤博士のお姿もさることながら、ここでは日頃より
そのやさしい心をやさしいことばで説かれた続けた詩人の
ような念仏者、佐藤良智博士の面目を心から偲びたい。



良智君の思い出

佐藤密雄

(鎌倉大仏殿高徳院貢主
仏教大学教授・文博)

昨年末に出版した拙著のはしぎに、「昭和三年の三月から九年夏迄、毎日曜日に、多摩の萩原雲来先生のお宅にうかがって、巴利文の原典講読をして頂いた。分別論註、法集論註、論事註を読んで頂いたが、これは午前十時頃から始まるが、奥様の料理を頂くこともあって、午後も講読のあることもあり、この為めの下準備にはかなりの時間を費やした記憶がある……初めは佐藤良智君と二人で通ったが、途中で、ドイツから帰られたばかりの、ラグヴァンシャの訳者、旧姓徳永、現宗茅生女史も参加され、その後、発題論の訳者山崎良順君も三年程参加された」と書いたが、この多摩通いが、やがて、南伝大藏経の出版の折に、良智君の「法集論」、良智・密雄の

「論事」、密雄の「分別論」、山崎の「発題論」となっている。山崎君は良智さんの忌明け法要に出席されたが現在の中観山主、バンチャタントラ以来幾つかの梵文学書を出された宗女史は、八十歳を超えて、一昨年、難解を克服してカリダーサのラグヴァンシャを出版された。多摩ゼミナー夫々に足跡を残すことになったといえる。良智君と二人で発想した多摩ゼミナーに、実りがあったといふべきである。

良智君は宗教大学を、故栗本俊道君と首席を分けて出た。大正大学の第一回生となる前に、東大に聴講して、

島地大等師の最晩年の仏教大綱の講座にも参じた。好学の士であったが、また白樺派の詩人。戦前の書齋に武者小路氏の色紙をかかっていたが、師籍光円寺があつて、新しい村に参加出来なかつたのであろう。詩は発表されたものの外にも日記等に相当にある筈。然し私には、その詩についての評価の能力のないのは残念である。

私が、仏教専門学校の教授となつて以来、年々十数人の同校卒業生を大正大学に送ることになつたが、この世話を引受けて貰つたのも君であつた。此の時に君が造つたのが顕浄会である。その頃また、栗本俊道君が、土地と建物を提供して、大乘学寮を經營した。そして顕浄会の学生の多くは、この学寮に入ることとなつた。この学寮の寮主は栗本君であつたが、学問的な指導者は君であつた。勿論、私も名を連ねてはいたが、それは名のみであつた。この顕浄会・大乘学寮からは幾多の秀才を産んだ。残念乍らその多くの人材を戦争で失つたのはまことに残念であつた。然し、それでも現在の大正大学を背負う、代表的学人達を初め、地方教界に活躍する布教家、社会事業家や、宗門經營の支配層の主流をなす人物も多い。君の功は今に生きているというべきである。

私が大正大学で、仏教学部長となつた時であつた。事務幹事と学生課長の登用について、故真野正順先生に相談して、幹事に村瀬秀雄氏を選ぶことにし、これは成功したが、学生課長には困つた。二、三の人名を挙げたがいずれも、難色あり、辞退されて困つた時であつた。勿論、良智君が私と同行し、交渉に當つて呉れていたのであつたが、ついに「僕がやろう」といつて呉れた。私が学部長で、其の下に君を配置することは、当時の大正大学の機構として、私としては言い出し難いことなのであつたが、それを承知で、人事の困難を見て、その職を受けようと申し出てくれたのである。友人とは有難いものと、感動して御願ひした。

君の大学卒業論文はアビダルマに於ける「三科論の成立」であつた。当時の、仏教学の研究室の主任は加藤精神教授であつたが、君は、宗教大学以来椎尾弁匡教授についてアビダルマの研究に専念した関係から、卒論の指導教授も椎尾教授であつた。多少専門のことになるが、古く大正時代のこと、椎尾教授に「六足論の研究」という論文が、宗教大学の機関紙「宗教界」に、連続して発表

された。この論文の価値は半世紀以上を過ぎた今日もなお、重要な意味を持っているが、良智君の研究はこれに基き、その成果は、後の椎尾教授の名著「仏教哲学」に資料として採用されたものである。また椎尾教授の「六



足論の研究」論述の中に重視されたのは、北伝の「舍利弗阿毘曇論」と南伝の「分別論」「法集論」であったが、この中の「法集論」を、南伝大蔵経に和訳したのも君であった。

私も君の驥尾に付して、アビダルマの徒ではあったが、戦後二十年程を律藏に没頭してしまった。然しこれは、椎尾教授の、アゴン以来の仏教戒学を知らずして、大乘戒(円戒)を論じて、木を知らずして花の色を論ずる如きで、花の意義を知ることにならないとの説に促されたものであった。このことについても、君は賛成しはげまして呉れた。私の業績は未だに大成せず、律藏に停滞していることを、君に対しても詫びねばならない。君と共に、荻原先生から教えられ、いずれ手をつけようと言った「大乘成業論」は、君の病気の頃から初めて、漸く昨年末に刊行出来た。これは是非とも君に見てもらいたかったが、一週間ばかりで間に合わなかった。残念であった。

君と私とに取って一番楽しかったのは、多摩の荻原先生の所に通った時代であった。約七年間、途上、多くの夢を抱いて、研究の前途を語り合った。二人が描いた未来の構想は多彩のほずであったが、生きた現実はお互いに夢の世界ではなかった。そのことについては、亦た浄土で語ろう。私も長くはない筈だ。



佐藤良智先生を偲んで

— 思いつくまま —

しず　なが　こう　えい
静　永　孝　英

(東京・小日向深光寺住職)

過日、椎尾弁章師が「先考(弁匡博士)の書棚を整理していたら、こんな珍らしいものが出て来た」と言って、若き日の佐藤良智先生の大学卒業論文を届けてくださった。

よく検ると、たしかに椎尾先生の自筆で論文の表紙の右肩のところにペンで、「α」と採点してある。「アルファ」点であるから、「優」点と解しても可からう。

論題は、竜樹菩薩の「中論」に関するものである。数えて見ると今から丁度五十五年、所謂半世紀以前のものである。従って文体は全くの文語調である。

椎尾先生の書棚に保存されるほどのものだから「将来、楽しい青年である」と、思われたのであらう。そ

の当時から椎尾先生などに「覚」えがよかったらしい。けれど彼は其の後、荻原雲来博士に師事して、サンズクリット語や、パーリ語を研修して原始仏教を研究しようとしたのではなからうか。その成果の一端として「論事」の翻訳を佐藤密雄師と共に世に問うている。

ところが世の中はままならぬもので、先師良海上人の衣鉢を継がなければならない、明照幼稚園を発展させなければならぬ、と言う事態が追っかけて来た。

明照幼稚園創立十周年記念大会の相談をうけて、銀座の蚕糸会館でそれを盛大に催したことを、つい昨日のことであったごとく思い出す。その時のことであるが、園長は權威をつけなければならぬと言って、大きい純金

の鎖を、チョッキの右の胸ポケットから、左の胸ポケットへと渡し掛けをして胸をはって演台に立って得意になって挨拶をしていた。その金鎖は、友人の師匠のものを、私が使っていて借りて来たものである。

さいわいに、園長はじめ、関係者一同の努力が果実を結んで、現在では仏教関係の幼稚園では、最右翼に列している。うれしいことである。

戦後の復興が愈々、進んで来るに従い寺門経営がいそがしくなってきた。

大学に教授として関係しているから学究を続けなければならぬ。その他、各種の雑務がある。その当時、だいたいぶん悩んで居た。そんなことを小生に愚痴っていたことを覚えていて。

時に、たまたまご子息の良純君が成長して来た。

「彼に自分の希望、理想を托そう」

と、仏教研究に印度国へと出国させた。

良純君が印度留学中、先生の心の中は察するに余りあるものがあつた。

大変に淋しがっているものだから、小生は先生に何か

「趣味」を持つことを勧めようと思い「表千家流茶道」をすすめ共に練習した。一カ年半ばかり続けた。

と、同時に中村素堂先生について書道を修得することを目指す、これも相い共に研修しはじめた。

その後、先生の書道の研修は、没年の今日まで二十五カ年程、継続した。その熱意の影響や、具体的な「顕」れとして、大正大学の書道研究会が生れ、益々盛大になるうとしている、今年の一月二十三日から二十八日まで銀座の『ゆうきや画廊』で卒業記念書道展が開催されたがそれに先生の遺作品が展示されていた。以て瞑すべし。

そして先生は又、「人情」のまことに、こまやかなものがあつた。どちらかと言えば「情」の人であつた。従って先生のもとには沢山の学生や、若い学究者が集まつた。小生などもその一人であらう。小生が高校の校長をやった時、立派な硯箱を贈ってくれた。有難く思っている。十数年経った今日も尚、毎日大切に使用している。

思い出すが皇紀二千六百年の祝賀のあつた時である。

先生はシルクハットを被り、祝賀会に出席して、その帰途われわれ友人仲間と行動を共にして、箱根に出張した

ことがあった。その時のことであるが、われわれ一同は旅館で用意した「丹前衣」に着更えた。ところが偶然にも運わるく、先生が着用した「丹前衣」の襟の中に、縫針が一本、置き忘れてあるのに気付いた。そこで先生は、番頭を呼んで、その縫針を見せて注意した。平身低頭して、旅館側の不注意をあやまっている番頭に、

「今日は国を挙げての祝日である。その祝日に『針』を差しては不可ん。大いに祝杯を挙げよう、乾杯しよう」と、宴会を一層、にぎやかにしてくれた。禍を転じて福にする苦勞人でもあった。

一面、又、はげしい面もあった。眼の中へ入れてしま

いたいぐらい可愛がっていたお孫さんが、

「お爺ちゃんは、たいへん、こわいけれど、世界中で一番好き」

と、言っているのを聞いても判る。

去る一月十二日満中陰法要のあとで、光円寺の歴代墓地に先生を納骨する時、お孫さんたちが、涙を流し眼がしらをおさえながら、お爺ちゃんの納まって行く穴の中を、じっと見つめていたのが、深く印象的であった。

良智大兄よ、孫たちの中に還り来たって、光円寺を守り、幼稚園を護り、関係者一同を導かれんことを。

惜別之情難禁。素天。合十。



良智先生と顕浄会

しぶ
や
けん
おう
渋谷賢庵

(茅野市心光寺住職)

良智先生と顕浄会のお話を申し上げるには、太平洋戦

争の当時のことを思い出していただかなくてはなりません

ん。

私たちは仏教専門学校を昭和十七年十一月二十五日に卒業いたしました。本来ならば十八年三月に卒業すべきところを繰上げ卒業となったわけです。そして出征前にとりうで知恩院にて加行に入りました。

私たちは行をすませると東京に発ちました。そして大正大学に入りました。私たちの同期には私を除けばなかなかの勉強家がいきました。そこでこの同期の者が集って研究会をやるうということになり、第一回を早稲田に入って目白に下宿していた加藤秀輝君の所に寄せてもらいました。しかしいつも下宿ではというようなことから、鎌倉の佐藤密雄先生のお世話で良智先生のお宅をお借りし、先生に中心になっていただいて、毎月一回、誰かが近ごろ研究していることについて発表し、それを批判し合う会が開かれることとなりました。

会の名前は、はじめ共生会の真野孝信君が椎尾先生にお願いして戴いた「研浄会」というのですが、会員諸氏に意見があり、浄土を研究することはお浄土を批判するということにもとれる。折角椎尾先生にいただいた名前であるがなんとかならないだろうかとのこと

で、良智先生に相談したところ「願浄会」とすれば浄土を願わすこととなりいいではないかとのことで「願浄会」という名に決りました。

会は毎月当番を決め、夕方より先生のお宅で開かれました。集ったメンバーはアイウエオ順に申せば、赤尾敏弘君、内田信宏君、江夏寛真君、加藤秀輝君、真野孝信君、丹羽演誠君、前田（真野）竜海君、長島善雄君、安居香山君と私でした。始める前におつとめをして一枚起請文を唱えそしてはじまりました。発表者が発表し、発表し終るまで黙って聞く、そして質問とご批判がはじまるわけでして、形はそこらにある発表会と寸分違いませんが、発表する者も生半可なら聞く者はお生半可、その研鑽の程は今でも誰が何を発表したのか、いや自分が何を発表したのか覚えていないのでも想像がつくというものです。

それでも自分たちは一応玉突きや喫茶飲酒などを業としている学生諸君とはひと味違うと言ったような意識をもっていました。

「問題意識を持っていないといけない」
「悩まなければいけない」

「つまる所、ただ一向に念仏すべしだ」

こんな齒の浮いたような青二才たちのいうことを、先生は飽きもせず、実は飽きていらっしやったかも知れないが終始ニコニコして聞いて下さいました。ご批判ご叱責を一度も聞きませんでした。そして最後に、

「大いにやりたまえ」

と結んで下さいました。私たちは今まで打ち興じて口角泡を飛ばしていたことも忘れて「同唱十念」で同入和合海となりました。

その後、奥さんのうどんのご馳走をいただきました。

その当時、食管法が布かれていて一把の乾めんもままならないその中から、大勢の腕白どもに尽していただいた奥さんの心使いに、私たちはすっかり甘えきっていたものでした。

しかしながら戦争の重圧に私たちを締めつけてきていました。昭和十八年、ガダルカナル島転進、アッツ島玉碎、そしてついに明治神宮外苑における東条大将の閣兵となり学徒出陣につながっていったのです。

我々顕浄会員にもその時がせまってきました。正大卒業式、昭和十九年九月二十二日決定、もう卒論どころで

はありません。そしてその日も目睫にせまってまいりました。その年の秋の彼岸前の或る日、先生は私たちを箱根の強羅に招待して下さいました。今でもそのことは豪勢であるわけですが、当時とすれば大変なことでした。

私はお世話になっていた芝榮立院、福西先生のご親戚よりビール半ダースを譲っていただきそれを持って出かけました。富士五湖をながめつつ歩く道すがら肩にかけたビールのビンがあたり合ってさみしい音を立てました。

それから東京に戻ると、今日は上野、明日は東京駅と、一人去り二人去り旅立って行きました。会員は皆、ホームまで出て送りました。だんだん少くなってきましたが、その中には必ず先生の姿がありました。

信州飯田が実家である私は最後の一人となりました。先生はその私を当時の二等の切符を二枚買って上諏訪まで送って下さいました。

涙ながらに寝てしまつて、起きるともう上諏訪でした。先生は朝霧の立ちこめるホームから私を見送って下さいました。

先生は私たちにとって、大きな阿弥陀さまのふところであつたのです。

園長先生さようなら

明照幼稚園のある光円寺の住職、そして明照幼稚園の園長先生はお庭にある千二百五十年もたった大いちょう（戦災でやけどした）のこどものぎんなんをお庭や方々に植えて、それらがみんな見上げるように大きくなって、しかもそのいちょうの葉で地面が真黄色に埋もれた昭和五十三年十一月二十六日、園児たちがおみどりまいるみほとけさまの所へ行かれました。園長先生は京都で生まれ、三浦半島の山寺で思う存分はだしてかけまわり、そうして勉強をしながら大きくなりました。光円寺には九才の時、父母と一緒にまいりました。そしてお父様が、大正十三年に幼稚園をつくりました。昭和八年、園長先生になりました。いつも色々の事を勉強し、そして「他の人の三倍は人のために働かなくては」と申していました。お寺の事、幼稚園の事、大学の事、ほんとうに一生懸命でした。お寺も幼

稚園も戦争で全部やけました。皆さんに迷惑をかけたり、助けていただいて今の様に立派になりました。そして至らぬながら心をこめて一生懸命に大切なお子さま方を育て、戦後だけでも参千百名の卒園生を送りました。

戦後の混乱の中では、幼稚園、大学など色々の制度の基礎をかためる時でもありました。日本私立幼稚園協会、東京都私立幼稚園協会等の理事長、理事、日本私立大学連盟の理事、その他私立学校教職員共済組合運営審議会委員等々を勤めました。

大正大学では昭和三十七年文学博士号をいただき、事務局長、文学部長をいたしました。そして停年退職後名誉教授に列せられました。

昭和四十九年には教育功労者として、天皇陛下から勲三等瑞宝章をいただきました。昭和四十一年には文部大臣より教育九

十周年、昭和四十五年には文京区長より永年教育功労、昭和四十八年には東京都美濃部知事より功労表彰をされました。また明照幼稚園も五十周年を祝って頂きました。そして、昭和五十一年六月十四日朝たおれました。

一年二カ月の病院生活を送り、家に帰ってからだんだん元気になって、おみどりにおまいりしたり、車いすで方々を回りました。幼稚園の園舎、こどもたちの元気にあそんでいる姿、そしておむかえのお母様方等々を。その頃の様子を今思えば、なごりおしそうにあかずにがめておりました。柿の実が枝もたわわに真赤になっているのを眺め、それから肺炎をおこして一カ月、とうとうおわかれになってしまいました。

長い長い間、本当に本当にありがとうございます。心から厚くお礼を申しあげます。
(佐藤良子)

右の一文は佐藤良子博士ご内室良子夫人が、明照幼稚園のかわいい園児たちにお話しされたものです。ご葬儀の折に、お母様たちにも付き添われた子供たちのけなげな合掌の姿が、私たちに大変印象的でした。正受心院譲蓮社正僧正勸学謙上人信阿恭道良智大和尚、どうか安らかに往生して下さい。

法 話



お彼岸におもう

うお お こう きゆう
魚 尾 晃 久

(三島市願成寺住職)

春のお彼岸がまたやってきます。お彼岸といえは、殆ど日本中の仏教徒は宗派のいかんをとわず、お寺詣り、といっても実質的にはお墓参りに出かけます。わが家の先祖の墓に花と線香をあげて頭をさげる簡単な行事の一時をもちます。長い既成仏教のもつ因襲です。お寺では、悟りの世界である彼岸に到るために、迷いの此の岸に立つ私たちは、布施・持戒・忍辱・精進・禅定・智慧の六波羅蜜を行ないましょう、と説きます。彼岸会の起源は聖徳太子の時代に始まる、と伝えられていますから、随分長い伝統を持った日本特有の行事です。こうした形の上では、長い命脈をもったお彼岸です。

何らの疑いをも持たずに、また、今年もお彼岸詣でが続けられることでしょうが、墓参りする態度に変化をきたしている事は否定出来ません。或る日、私が朝早く境内を掃いていた時のことです。一人の青年が車で駆けこんできて、自分の家の墓に行きました。私が「お墓参りですか、朝早くから殊勝なことですね」ところが彼の返事は「僕はどうってことはないんだが、おばあちゃんが行ってこいっていうから」と。まあ、おばあちゃんに逆うのも気の毒だから、とに角やってきた、という気配です。「これから会社に行くんですよ」という話です。まだ、この青年は好い方です。おばあちゃんの言葉に柔順

に従って、墓参りに来ただけ。しかし、少しもお彼岸の墓参の意義を評価していません。

こんな些細なことに、ふと思ひ浮んだのが「仏教離れ」という言葉です。各家庭の仏壇所持の数にきいてみましょう。農村では100%近く仏壇を持っていますが、都会ではずっと落ちる、それもサラリーマンの多い住宅地区では、50%ぐらいに減っているそうです。都会人は功利的です。直接生活の足しにならないものには接近しません。宗教は男女・年齢・地域の相違によって差異があります。宗教は男女・年齢・地域の相違によって差異があります。彼と彼女は、まだまだ死なない、という死への連絡観念がありません。それはそれで当然でしょうが、お釈迦さまの教えが最も生活的で、しかも予想以上に役立つものであることを知らないのです。

○
布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧の六波羅蜜の話をして、その内容が観念的ですから、何となく解る、悪くないような気もするが、といって直ぐ生活にとり入る迫力がないので、そのうちに忘れて、遠いおぼろげ

な知識としかありません。宗教に対する態度・信仰の度合は随分地域によって差異のあるものです。また、時代によってちがっています。その時代的差異のときが、時代変動の激しい今、眼前に來ているような気がします。

宗教学者たちは、これを「社会変動と宗教」或は「伝統社会の崩壊と宗教」というテーマのもとに討論合っています。それが脱宗教とか宗教離れ、世俗化の現実となつて私たちを心配させます。宗教状況はまことに複雑で、一事象だけでは結果がいえませんが、社会変動は必ずありますし、伝統の崩壊も現実に見られます。世俗化は、それがたわいのないものほど、結構行われています。人間の宗教心理は微妙で、あんな事が、と思われる事が人氣を博すものです。

例のポックリ寺巡拝を見てみましょう。観光バスでの団体募集をやつて盛況です。十人が十人全部、それを信じているわけではないのですが、それでも、と一縷の望みを期待して出かけてゆきます。最後がポックリであるように念願するのは老人の最上の望みです。ポックリという名前の魅力の世俗化にひかれての心理です。

私が北海道観光に行った時のことです。材木屋の主人

が来て、旅行中、雨が降らないように読経をしておいてほしい、というのです。祈禱です。私には出来ない、と拒絶しましたが、僧侶の權威を失ったようでした。こうした世俗化した信仰が、或る者にとっては一大事なのです。真面目な人間生活の指針たるべき人間釈迦の教化説法が忘れられて、祈る、たのむ宗教となってしまうています。

具体的な実例がよく納得されやすいので、重ねて経験をお話し致します。私の寺の檀徒の親戚の者が交通事故で死亡した時のことです。寺で葬儀の準備をして待つていましたが、定刻になっても誰も来ません。待つこと三時間、やっと施主たちが集って、種々の事情で遅くなった、というのです。とに角、型の通り式を執行しましたが、後できくと、K会の幹部の者から、私の寺は方位が悪いのでまた事故が起きると言われて逡巡していたので、親戚間にゴタゴタが起き遅くなった、というのです。骨肉の者は、そう言われると妙な気持ちになって一瞬、決心しにくい気持はわかりますが、何故そうなるかを究明しようとしません。

人々の宗教的無智が世俗化を増長させるのです。自分

自身にたよる權威というものがまったくありません。こんな大衆に説法することは本当にむづかしい事です。無智な大衆は、自分の利益にならないければ動かない功利性があります。または理窟と情感とで籠絡して熱狂的になければついてきません。

さて、お彼岸だから、迷える此の岸から悟りの世界の彼岸にゆきつくために先述の六波羅蜜を実践しなさい、と説きます。ところが既に「坊主の説教聞いて何になる」という感触で、在家仏教の扉をたく人が少くありません。お彼岸といえは六波羅蜜や観經の理想觀の話である。お釈迦さまの価値は説法の内容の実践であります。高遠なものが理想であっても庶民には可能性がないのです。実際に行ない得て、しかも実利的でなくては人々はいって来ません。だから布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧と六つならべても単なる知識に終ってしまします。

もう一つ申しあげたいことはお墓のことです。

いま、かなりの墓相の本が出ています。奈良の自称墓相学者が私の所に来るといいます。私は墓相のことは道端良秀先生の「墓と仏教——その歴史と墓相批判——」以外には、どれも反対ですから、おいでになる必要はない、と書き送りました。あわよくば私を同志に引き入れて、家運は墓相でまゐる、という運動の手先きにしよう、というのでしょうか。

死者に対して、私たちは追慕と恐怖の二つの異なった感情を持っています。死者のいる墓という次元を別にする世界に対して、粗略にすると禍をもたらす、という原始的な観念にとらわれています。墓石の型が悪い、方位が悪い等々からはじまって、吉凶が墓相によってきまると解かれているが、何故そうなのかの説明が一つもありません。また残念なことにそれを迎合する僧侶もあるのです。

こうして、一方には既成仏教離れが指摘されながら、迷信的な面への仏教的挺入れがはびこっています。過去

の仏教史が証明しているように、奈良・平安仏教にあきたらずして鎌倉仏教が抬頭して来たことを思えば、何時の日にか淘汰されてゆくでしょうが、目前の実利に眩惑されて迷い続けている大勢の人がいる事は残念なことです。

先祖といっても、青年たちには、おちいさん、おばあさんの事を思い浮かべるだけで、それ以上の古い人には関係がない、と思っています。実感が湧いてきません。だが尨大な土地をもっている人たちは、償を算する財産に顔を見知らない先祖の恩恵を思いうかべます。宗教事情も社会と共に刻々に変ってゆきますが、他面、まだまだ旧弊にとらわれている所も見すこすことは出来ません。

お彼岸になりますと、墓前を訪れる人々をみて、つくづく世の変転に思いをはせ、諸行無常——全ての人も物も変ってゆくもので同時点に止まっていない、という感慨にひたるのです。

■善導大師の生涯とその教え■

— 四 —

◇ ◇ 曇鸞大師 ◇ ◇

○

さきに述べた廬山の慧遠は、中国浄土教の始祖として仰がれ今日まで尊敬されていますが、その念仏結社のメンバーも、僧俗ともすぐれた人びとが多かったわけで、その影響も大きく、中国浄土教の初期の歴史においては特筆されるべきものでありました。しかしながら、その念仏結社が、『般舟三昧経』によるかぎり、わが国の浄土諸宗派のような他力本願の宗教ではかならずしもなかったわけで、廬山の念仏結社の人びとは、持戒も堅固であり教養も高く、しかも般若の空智を体験するための禅観実践にはげみ、念仏三昧を修行したのであります。それは賢愚貴賤を問わずに人類が平等の救いをめざす浄土

往生の教えというより、えらばれたものの自力の浄土念仏ということができましよう。それに対して、北魏末から唐初期にかけて、すなわち六世紀から七世紀にわたって、あらわれた、曇鸞、道綽、善導の諸大師によって大成された浄土教は、遠く海を越え時をえだてて、十三世紀にいたりわが国の法然上人によって浄土宗が開かれ、その門下が栄えて今日にいたっているのであります。

かように善導大師を考える場合に、どうしても曇鸞大師にまでさかのぼらなければなりませんので、ここで曇鸞大師について少し述べてみたいと思います。

曇鸞大師は、中国は山西省北部の五台山の近くに、北魏孝文帝の時代に生まれ育ちました。五台山は神仙の霊山であり、曇鸞大師は十五歳でこの山に登り、出家し修

行にはげんだのですが、大師が二十歳のころ、孝文帝は都を大同から漢文化の古い中心地、洛陽へ遷しました。

帝王は、漢族文化を熱心に敬慕し、また仏教を信奉し護持するとともに、大同雲崗の石窟が完成すると、やがて洛陽の近くに有名な竜門の石窟開鑿事業をはじめると、仏教は盛んな様相を呈したのであります。

このように曇鸞大師は、内外の恵まれた環境のなかで仏教の研究と修道につとめはげまれたのでした。この時代は、有名な羅什が宣教した竜樹の仏教が、求道僧たちに修学されたのであります。羅什門下の俊英に僧肇（じやう）がいますが、かれは『肇論』とか『注維摩』をあらわして北魏の学僧たちにもっとも大きな影響をあたえ、曇鸞大師の説かれた浄土教もまた、羅什を通して紹介されたインドの竜樹の仏教と、中国の僧肇の思想の上に成り立っているともいえるのであります。

曇鸞大師が浄土教に回心したのは晩年のことであります。回心にいたるまでには深い苦悩の遍歴があったのです。大師が仏教の修道中に難病にとりつかれ、それを克服したとき、心底に湧き上ってきたのは、生命への執着であり、そのために中国伝承の不老長寿の法を得ること

でありました。広い中国を北から南へ、東から北へと千里、万里を道を遠しとせず、不老長寿の道を求めたのであります。ついに仙術の大家といわれる陶隱居に仙法の伝受をうけやがて途中洛陽の都に立ち寄ったのです。

当時の洛陽は仏教の全盛であり、ちょうど翻訳の大導師である菩提流支にめぐり合うことができました。神仙の道を伝受されて得意の大師に対して「人間世界に長寿の法があるといっても必ず人間は死ぬのであり、結局六道輪廻の転生を続けるだけである。輪廻を越える不死永生の道こそ求むべきものである」と説いて、菩提流支は『観無量寿経』を示し与えられたといのです。この『観経』こそ、生死を解脱して、永遠の不死の道を得る最上の法を示したものであるということを説かれて、さすが大乘仏教の哲理を究めている曇鸞大師は仙道長生術の目がさめて、浄土の信仰に回心したのであります。

曇鸞大師の教えは、まえに述べた慧遠のように『般舟三昧経』によっているのではなく、いわゆる「浄土三部経」を浄土往生の信仰のよりどころとして、竜樹の般若哲学の上に解釈して、純一な往生浄土の教えを説いているのです。しかも、大師は、この穢土からかの浄土に往

生することを「無生の生」といっておられます。この「無生の生」と徹したればこそ、そのまま真実の浄土往生が確信されたのでありましょう。

浄土教は、まえにも述べたように、賢愚の差別なく、すべての人びとが救われる宗教であるとともに、とくに凡夫であるわたしたちのために慈心を向けられた教えであります。曇鸞大師もいつも一切の衆生のためにということをお忘れずに「讀阿彌陀仏偈」に

「われを哀愍し覆護し法種をして増長せしめたまえ。

此の世より後生に及ぶまで願わくは仏よ常に摂受したまえ願わくは諸の衆生とともに、安樂國に往生せんと誓い祈っておられるのであります。

曇鸞大師の著作に有名な『往生論註』があります。これは世親の『無量寿経論』の注釈書であります。そのなかに竜樹の説として仏道修行の道として二種の道があることを説いています。一は難行道、二は易行道です。

難行道とは、五濁の世、無仏の時にあっては、不退転を求めることは難であり、難はまさに陸路を歩いて行く苦しきであるといっておられます。また易行道とは、ただ信仏の因縁をもって浄土に生まれんと願えば、仏の願力

に乗じて、すなわちかの浄土に往生することを得て、仏力加持して、すなわち大乘正定の聚に入る。これは水路の乗船は楽しいことが多いと同じである、と説いておられます。この難行道と易行道は、竜樹菩薩が説かれたこととありますが、曇鸞大師は、このことこそ仏意とうけとめて、無仏の時代に生をうけた現代に生きる人びとに對するなよりの警鐘のひびきとして説き示されたことなのであります。

「竜樹菩薩、阿彌陀如来の讃を造り、中に或は稽首礼言い、或は我帰命といい、或は歳命礼と言えり」

と『往生論註』に説いていますが、インドにおける大乘仏教の本流である竜樹や世親の示された浄土信仰の教えに導かれて、中国浄土教の礎となられたのであります。

曇鸞大師は、浄土教に帰入したのち、山西省の西南の地の山深かき石壁山玄中寺において、念仏実践の根本道場として教化にあたられるわけですが、やがて、道綽禪師は玄中寺を訪れて、曇鸞大師の碑文によって浄土教に傾倒し、さらには、善導大師が玄中寺において道綽禪師との出会いによって、中国浄土教は大きく展開していくのであります。

(宮林昭彦)

法然上人の弟子たち ⑦

津戸三郎為守のこと〔三〕



梶^{かじ}村^{むら}昇^{のぼる}

(亜細亜大学教授)

法然上人の法語を集めた『西方指南抄』、『和語灯録』、それに『四十八巻伝』等に、「鎌倉の二位の禪尼へ進ずる御返事」という長文の手紙が残されている。「二位の禪尼」とは、いうまでもなく頼朝の妻政子のことである。ところがこの手紙が、先に記した法然上人から津戸三郎に宛てた「九月十八日」付の手紙とほとんど同文なのである。『九巻伝』などは、「鎌倉の二位家より、条々尋申されけるにつきて、上人御返事の趣、此状（九月十八日付為守宛の手紙）に違せざる間、しげきによりてこれをのせず」と記しているくらいである。

同文の手紙が、宛先違いで二通あるということは、どういうことなのであろうか。この二通の手紙の関係をどう考えたらよいものであろうか。為守が上人から返事を戴いた事情は先に述べた通りであるが、政子はどのような理由で上人から同じような手紙をもらったのであろうか。『西方指南抄』本（中末）には、冒頭に、

カマクラノ二品比丘尼、聖人ノ御モトヘ念仏ノ功德ヲタツネ申サレタリケルニ、御返事とある。『四十八巻伝』本（二十五巻）には、

勸化上都にさかりして、道德辺鄙にをよびしかば、

鎌倉の二品禅尼、金剛戒帰依ともふかくして、蓮上房尊覺をつかひとして、念仏往生の事たづね申されたりければ、かの御返事に云

と記されている。二位の禅尼が、法然上人のもとへ念仏について尋ねてきたということは事実であろうと思われるが、それが「帰依ともふかくして」のものであったかどうかは疑わしい。それというのも、政子の信仰は、

『吾妻鏡』をみても、平安朝仏教の修法に熱心であったとはあるが、念仏信仰については何の記事も見いだせないし、新宗教に対しては、わずかに榮西に帰依していた程度のものである。それにその後の幕府の念仏対策をみても、必ずしも念仏信仰の深いもののやり方とは思われないからである。それならば、この手紙はどういう性質のものかといえば、幕府に政治的な必要性があつて一応念仏の内容を問いただしておくというようなものであったのではないかと思われる。それならば、その政治的必要性とはどういうことであろうか。

まず第一に考えられることは、これは後で詳しく触れなければならぬことであるが、津戸三郎は、念仏に帰依してから十年ほどたった元久三年（一二〇六）に、専修

念仏の一件で幕府に喚問されている。為守は驚いて法然上人に手紙を書き、喚問された時に何と答えればよいかを尋ねている。幕府の方も、津戸を訊問するために、前もって法然上人の専修念仏の内容を調べておく必要がある。そこで、二位の禅尼から直接に上人に手紙を差しだした。そこで上人は、相方にほとんど同文のものを書き送ったものであらう、という推察である。

この推察は十分考えられることであるし、私も以前にはそう思っていたこともあるが、今は為守が専修念仏に入信した直後のものではないかと考えている。それというのもこの事件に関する為守からの質問に対しては、「十月十八日」の日付のある上人から為守宛の手紙が今日残されているので、強いて「九月十八日」付の手紙をこの事件に結びつけて考えることはないのであらうと思われること、また、『九卷伝』の叙述をみても、建久六年、為守は頼朝に従つて下向後、「但信称名の行者と成て、念仏の行おこたらざりけるを、人ありて熊谷入道、津戸三郎は無智の者なればこそ、……と申ければ、津戸三郎、其子細を上人にたづね申ける時、此事にも限らず、条々の不審を尋申けるに付て、同年九月十八日、上人の

御返事、詮をとりてこれをのせば」とあって、この手紙は、為守下向後すぐのこととして記されている。この記録は信憑するに足るものがあると思われることなどがその主な理由である。

そうすると、為守宛消息の事情はわかったとしても、政子宛のものはどう考えたらよいのであろうか。思うに幕府の方も専修念仏については、このころには、すでに放置しておくにはあまりにも大きな事件となりつつあったということではなかっただろうか。先にも述べたように、すでに甘糟とか熊谷とかいう有力な鎌倉武士が専修念仏に帰しているのである。その上、今、津戸三郎が法然上人の許に走っている。人々の噂では、ただ念仏だけ称えれば救われるといって、無智の人々をひきいていくのだという。どうしても一応調べておく必要がある、というようなことではなかったのだろうか。それに加えて、この年、建久六年八月十日には、熊谷直実が京から鎌倉に来て、頼朝の前で、厭離穢土、欣求浄土の旨趣を堂々と述べている（『吾妻鏡』）。このようなことから、二位の禅尼が法然上人に直接、専修念仏の内容を尋ねておこうとしたことは無理からぬことであろうと思われる。

使いにたった蓮上房尊覚は、東国での専修念仏についての噂も法然上人に述べたであろう。上人は、いずれは熊谷なり、津戸なりが、幕府に喚問されて、念仏の義を問われることもあろうと予測されたのかも知れない。こうした結果が、為守宛消息と政子宛のものが同文となった理由ではなかったかと思う。

同文の消息が二通あったという問題はこのくらいにして、少し為守宛消息の内容に触れてみたい。消息の冒頭に書かれている、「くまがやの入道・つとの三郎は、無智のものなればこそ、念仏おぼすすめたれ」という一節を読んでいると、私は、「いつの世でも人間は変らないものだなあ」と苦笑させられる。何が「変らないものか」といえば、自分のことは棚上げしておいて、人のことをとやかきいう井戸端会議の世界が変らないのである。くまがや、つのとを笑う人は、自分は彼らより有智のものと思っただけであらうが、その有智のものがどれだけ煩惱熾盛の人間について達観しているのかといえど、わかったものではない。あるいは、その有智の人々がありがたいと思っただけの平安朝の旧仏教が、どれだけ彼らの救いとなっているのかといえど、これまた問題に

はならない。しかし、人々はそのようなことを問おうとはしない。ただ他を指摘して笑うのである。人の世のおろかさというものであらう。

しかし、熊谷や津戸にしてみれば、いかに専修念仏に帰依したとはいえ、現実には、そのような噂に恬淡としてはおられなかったのであらう。ちょうど子供が親に言い付けるようなものであったかも知れない。「九月十八日」付の手紙に次の一節がある。



伝法然上人作

血文の阿弥陀如来

—谷保天満宮蔵—

一、いまいふべき事のあるとおほせられて候は、なに事にか候らむ、なむ条はばかりか候べき、おほせ候べし

「今一つ言いたいことがあるが、それは申し上げられない」とでも為守が上人に書き送ったのであらう。それに對して上人が「なんの遠慮があらうか、おっしゃりなさい」と言われたのである。その内容が何であるかはわからないが、申し上げたいことがあるのにはばかっている為守の心情が思いやられてあわれである。

この一節は、いうまでもなく為守個人宛のものであるから「二位の禪尼宛消息」にはない。そういえば「二位の禪尼宛消息」にはない文章がもう一つある。それは、

一、御仏おほせにしたがひて、開眼してくだしまいらせ候。阿弥陀の三尊づくりまいらせさせたまひて候なる、返々神妙に候。いかさまにも、仏像づくりまいらせたるはめでたき功德にて候也

というのである。為守が阿弥陀三尊をつくって京に送り、上人がこれを開眼されたというのである。造像起塔は必ずしも上人の奨められるところではない。しかし、京都から遠く離れた武蔵の地にあって、一心に阿弥陀三

尊を造った為守のことを思い、上人は「返々神妙」であり「めでたき功德」であると申されたのであろう。師弟のあつい心の通いあいを思わせられるものがある。

谷保天満宮には今も「伝法然上人作 血文の阿弥陀如来」(写真)というものがある。仏像鑑定は私にはできないが、高さ五〇センチほどの木像坐像で、一見して非常に古く、すばらしい相好をしている。法然上人が仏像を造られたという確かな記録はないので、「法然上人作」ということは信じたいが、上人からの手紙に、こうして仏像のことがはつきり記されているところをみれば、私にはこの仏像が上人開眼の阿弥陀像に思われてならない。この仏像は、像の下部から胎内にかけて穴があいており、後に述べることであるが、ここに為守が書いた血文の手紙が入っていたので「血文の阿弥陀如来」と言い伝えられてきたが、もちろん真偽のほどはわからない。ただ『武蔵名勝図絵』には、「御腹内に文の破れたる紙式枚ばかりあり。みな朽破して、いまは文字も見えず」とあるから、ここに手紙類が入っていたことだけはたしかなのではないだろうか。それが為守の書いた血文なのかどうかはわからないが。

想像をたくましくしてみると、これは、ひょっとすると法然上人から為守宛に來た消息類ではなかったのだろうかと思われる。もちろん何の証拠もないが、そう思ったところの一つの理由は、今日、上人から津戸宛の手紙は、この「九月十八日」付の手紙をいれて、長短合わせて全部で九通残されている。これは残されている上人の消息全体からみると三分の一近くに当る量であって、個人として最も多いことになる。もちろん上人は、これに何十倍する消息を書かれたことであろうが、残念ながら現在拝見できるものは、わずかしかない。その中で九通も為守宛のものがあるということは、為守が余程これを大切に保存していたということであろう。

このようなことを思うと、為守は、上人の手紙を仏像の胎内に入れて、日夜これを拝していたのではなかったろうかと思いたくなるわけである。為守の純真な性格を思うと十分考えられることである。この仏像が「伝法然上人作」といわれてきたのも、この辺に根拠があるのではないだろうか。

西行と仏教(二)

—生滅滅已・寂滅為樂—

河こうの
野よし
喜お
雄

(文芸評論家)



三 その歌業(統)

前号において一応見ておいたように、西行は明らかに世を厭い、世を捨てたのであるが、その「世を捨てる人はまことに捨てるかは」の一首の示しているように、彼は決してその生きた当時の社会、また、その中における彼の人生全般を捨棄したのではなくて、そのいくつかの詠歌に明きらかなように、当代社会の低迷せる世俗性、卑賤

なる世紀末性を厭悪・捨棄したのであり、そしてそれを止揚・超脱することによって、真の自分自身の人生を生き抜き、生き切ろうとしたのである。

故に彼は当代社会を形成する人間全般を嫌悪・忌避したのではなくて、「山家集」中に幾度も示されているように、彼には少なからぬ知己・友人が居たのであり、ことに彼と同様出世・隠遁した風騷の人物が多かった。

しかしながら、その知己・友人たちに

も、彼らが人間である以上、それぞれに最小限度の人間の弱点・性癖は持っていたであらうし、敏感・尖鋭なる詩人として、瞬間の間にそれを看破し、またそれを彼自身の行藏とも思い合わせて反省・自己批判し、それがまた直ちに自己嫌悪に繋がるようなことも、屢々あったものと思われ、その交遊には、おのづから一定限界が存したものと考えられる。

それでは、その時、彼はどのようにそれを考え、それに対して、どの様に自分を処

して行つたか。

私はそこに天地自然・山河草木——ということを考えたいと思う。

人間はその共同社会において、他人とともに生きるものであるが、彼はまた同時に、その当代の山河草木・天地自然のさ中に生きる。

見犬を原ッパに伴れて行つて放してやると、狂つたように駆け廻つて、止どまるところを知らない。

人間もおそらく原始的にはそうであつて、天地自然・山河草木のさ中に、自身の動物的生存を確認し、それに歡喜することは、私たちの人間の原初的・動物的な本能ではなかつたか、と思われる。

しかしながら、人類文化の進歩と、その社会性の発展とは、歴史的に漸次そのような本能を忘却せしめ、ある限られた人物だけにしか、その天地自然・山河草木のさ中に生きる喜悅を記憶・存続せしめなかつたものと思われる。

そして、わが西行の運んだ、その人生、一生に一度しか生きない人生——を生き抜

き、生き切るための道は、私の「法」に従いかつ教えられて、その天地自然・山河草木のさ中に自分自身を遊行せしめつつ、その「生ける喜悅」を心底から絶叫・高吟することであつた。

彼の詠歌自体に、その具体性を見よう。

何となく春になりぬと聞く日より

心にかかるみ吉野の山

わか菜つむ野辺の霞ぞあはれなる

昔を遠く隔つと思へば

若菜おふる春の野守に我なりて

うき世を人につみ知らせばや

心せむ賤が垣ねの梅はあやな

よしなく過ぐる人とどめける

山ふかみ霞こめたる柴の庵

こととふものは谷のうぐひす

山ざとに誰を又こはよぶこ鳥

ひとりのみこそ住まむと思ふに

春といへば誰も吉野の花をおもふ

心にふかきゆあやあるらむ

今さらに春を忘るる花もあらじ

やすく待ちつつ今日も暮らさむ

おぼつかないづれの山の峰よりか

待たるる花の咲きはじむらむ

わきて見む老木は花もあはれなり

今いくたびか春にあふべき

おのづから花なき年の春もあらば

何につけてか日をくらさまし

年を経ておなじ梢に匂へども

花こそ人にあかれざりけれ

木のもととは見る人しげし桜花

よそにながめて我は惜しまむ

吉野山梢の花を見し日より

心は身にも添はずなりにき

花にそむ心はいかで残りけむ

捨てはてにきと思ふわが身に

身を分けて見ぬ梢なくつくさばや

よろづの山の花の盛を

仏には桜の花をたてまつれ

わが後の世を人とぶらはば

何とかや世にありがたき名をしたる

花も桜にまさりしもせじ

のどかなる心をさへに過しつつ

花ゆゑにこそ春を待ちしか

ならひありて風さそふとも山桜

たづぬる我を待ちつけてちれ

今よりは花見む人に伝へおかむ

世をのがれつつ山に住まむと

わび人の涙に似たる桜かな

風身にしめばまづこぼれつつ

吉野山やがて出でじと思ふ身を

花ちりなばと人や待つらむ

山寒み花咲くべくもなかりけり

あまりかねても尋ね来にけり

おぼつかぬ春は心の花にのみ

いづれの年かうかれそめけむ

吹く風はなべて梢にあたるかな

かばかり人の惜しむ桜を

なにとなくあだなる花の色をしも

心にくちかく染めはじめけむ

吉野山こそぞのしをりの道かへて

まだ見ぬかたの花を尋ねむ

花を待つ心こそなほ昔なれ

春にはうとくなりにしものを

よしの山花をのどかに見ましやは

うきがうれしき我が身なりけり

さらばまたなげきやそはむ山桜

さかりになるはうれしけれども

いかでわれ此世の外の思ひ出に

風をいとはで花をながめむ

年を経て待つと惜しむと山桜

心は春をつくすなりけり

うき世にはとどめおかしと春風の

ちらすは花を惜しむなりけり

惜しめばと思ひげもなくあだにちる

花は心ぞかしこかりける

春ふかみ枝もうごかでちる花は

風のとがにはあらぬなるべし

道の辺の清水ながるる柳蔭

しばしとてこそ立ちどまりつれ

さまざまのあはれをこめて梢ふく

風に秋しるみ山べのさと

おしなべて本草の末のはしまでも

なびきて秋のあはれ見えける

吹きわたる風も哀をひとしめて

いづくも寝き秋の夕ぐれ

ひとりねの寝さめの床のさむしろに

涙催すきりきりすかな

心なき身にもあはれは知られけり

鳴たつ沢の秋の夕ぐれ

をじか鳴く小倉の山の裾ちかみ

ただひとりすむ我が心かな

何事もかはりのみ行く世の中に

おなじかげにてすめる月かな

ながむればいなや心の苦しきに

いたくなすみそ秋の夜の月

津の国の難波の春は夢なれや

芦の枯葉に風わたるなり

岩戸あけしあまつみことのそのかみに

桜を誰か植ゑ始めけむ

聞きもせずたはしね山の桜ばな

吉野の外にかかるべしとは

あだに散る木葉につけて思ふかな

風さそふめる露の命を

山里は雪ふかりしをりよりは

しげるむぐらぞ道はとめける

春ごとに花にこころをなぐさめて

六十あまりのとしをへにける

世をうしと思ひけるにぞなりぬべき

吉野の奥へ深く入りなば

前号の所掲歌においては、あれほど高踏・至極の哲学観・人生観を見事に詩化している西行が、上掲諸歌においては、恰かも

掌を返すが如くに、天地自然・山河草木の
さ中に没入して、そのさ中に生き通し、生
き抜くその自身の喜びを、宛然、放歌、高
吟している。

西行はその出家後、暫くは京都近傍に閑
居していたのであるが、一度隠遁・閑居し
て、天地自然・山河草木のさ中に起居・飲
食してみると、世俗に超絶しつつ、その山
河・自然に生き通し、生き抜くことが、当
代の世俗の中心であったところの、京都の
近傍などでは、到底、貫達し得べくもない
ことを、比類ない寂知の詩人として、彼は
幾何もなく具体的に確認するとともに、同
時に、その卓抜せる詩人的直観によつて、
彼がその「隠遁」完遂のためには、もっと
完全な隠遁、すなわち、深山幽谷・辺鄙僻
地への移動、またその延長として、日本国
全国の遊行——が必要であること悉皆悟得
していた。彼は京都近傍を離れて、熊野・
吉野に隠遁するとともに、また全国的に遠
く奥羽・九州・四国まで遊行し、ことに奥
羽には再度も訪れているのである。
そしてその遊行・馳驅裡にその山河草木

を高唱・諷吟するとともに、同時にその深
奥・秘蘊に味到しつつ、その悟道の高度を
高めて行くのであるが、その彼の対象たる
山河草木の中で、彼の関心の最高・的とな
ったものこそ、他でもない桜、ことに山桜
であった。

彼のその関心のピークを示すものこそ、
他でもない前号所掲の名歌、

ねがはくは花の下にて春死なん

そのきさらぎのもち月の頃

であることは、言うまでもあるまい。もし
て二月十五日が、恰かも山桜の盛花時（二月
十五日は現行暦三月三十日）であるとともに、
同時に釈迦入寂・即仏滅の日であったこと
は周知の通りであり、「西行」を号した彼
が、その釈尊入滅と日を同じうして、満開
の山桜に睥りつつ、その一生を終えんとし
た事実（そして、彼はその希望通り、十五日の
翌十六日に入寂しているのであるが）は、仏教、
その「法」に悉皆悟入した彼が、同時に、
その悟入の具象化として、山河草木、その
象徴としての山桜——への悉皆没入・味到
したことを示している。

仏法の教示に従つての隠遁・悟道が、桜
花への味到、その高吟——となつてゐる事
実は、そもそもこれを如何に解すべきであ
ろうか。
章を改めよう。

四、生滅滅已・寂滅為樂

私は、前章最後の、西行に対する疑問を
解く鍵が、少なくとも以下の四つを存す
と考える。

その一は、「涅槃經」における、

諸行無常 是生滅法

生滅滅已 寂滅為樂

の説くところであり、その二は、「五灯会
元」において、

「世尊在靈山會上、拈華示衆。是時
衆皆寂然。惟迦葉尊者、破顏微笑。世尊
云、吾有正法眼藏・涅槃妙心・実相無相
・微妙法門。不立文字、教外別伝。付。
嘱摩訶迦葉」

と伝えられるところの、いわゆる「拈華微
笑」であり、その三は、前掲、道元の「正

法眼藏」山水経劈頭における

「而今の山水は古仏の道現成なり」

の一偈であつて、最後は日本屈指の兵法家、武田信玄の、

「参禅別に秘法なし。ただ生死の切なるを思うのみ」

の一語である。

便宜上、信玄の一語から始めよう。

仏教の経文におけるいわゆる「仏説」は、釈尊歿後における数代の仏弟子が、釈迦自身の教説を解説したものが大部分であつて、多分に無用の観念論があつた。そして、その仏典が中国に伝来せられてから、その儒教・道教の影響を蒙りつつ、その独特の哲学によつて漸次その異分子を捨棄せられ、これこそ真に仏説として確立せられたものこそ、他ならぬ禅宗であるとせられる。

そして、鎌倉時代以降わが国に盛行したその禅宗に入門して、大僧正位まで獲得した武田信玄は、おそらくわが国最高の兵法家として、決して少なからぬ学識を有し、また武将として常に生死の巷に出入して

た次第もあつて、仏教の真義が、「生死の切を思念しつつ生くる」ことに存することを、入門後幾何もなくして悟入したのであらう。

そして、仏教に対する、この信玄の理解を別説するものこそ、他ならぬ上掲「涅槃経」の経文、ことにその「生滅滅已・寂滅為楽」の八字である。

いわゆる「生滅法」によつて、「諸行無常」であつて、人間も一度生まれ出でて以来、僅々百年未満にして、死を免れ得ない。その一生に一度しか生きられないで、死んで了わなければならない自分自身の人を、「生滅滅已」して「寂滅為楽」すなわち、一生を生き通し、生き切つて、笑つて死んで極楽へ行けるためには、その「生死の切なるを思ひつつ」必死に自分自身を生き抜き、生き切るのほかになく、生き抜き、生き切つてこそ、始めて、「笑つて死ねる」即ち「寂滅為楽」で、極楽往生が出来るであらう。

然り、而うして、人間のそのような、「自分自身を生き抜き、生き切る」ことを、具

体的に示しているのが、釈迦の「拈華」ではないか、と私は考える。

この「拈」を和訓で「つまむ」と訓んでいるが、「康熙字典」の「広韻」に、「指取物也」とあるように、それはむしろ「指さした」の意であつて、左手に満開の蓮華を持し、右手でこれを指さして、無言で、「この蓮華をどう思うか」と、会衆に問うたのであらう。誰も答へ得る者がなかつた。独り迦葉尊者だけが、「ああそうですか」と言わんばかりに破顔微笑した。釈迦もまたその微笑を理解して、微笑を返しつつ、迦葉に「正法眼藏」以下のその「実相、無相」の「微妙法門」を付嘱したのである。

それでは、この釈迦と迦葉とが、お互いに一語も発せずして、相互に微笑・了解しあつたところのものは、果して何であつたのか。

そしてそれを解説するものこそ、実に上掲道元の一語ではないか、と私は確信する。私どもが常に現前に見るところの山河草木は、春夏秋冬、その天地自然に應じつ

つ、つねにその最善を生き抜いている。そして、実にそのところに古仏釈迦の道が現成せられているのであって、我々人間もまたその所与の環境に従いつつ、必死にその最善を生き抜くべきだ、というのが、おそらくはこの一偈の真意であろう。

そして、道元のいわゆる「而会山水」は直ちにまた釈迦の「拈華」の「華」とシノニームなのであって、蓮華もまたその所与の環境を生き抜いて、見事な花を咲かせているからである。

西行は、おそらく如上のような仏教の真意を理解しつつ、その天性的詩人としての自身を生き通し切ったのであり、それこそが、真に仏教を味解・遵守するもの、と確信していたに違いない、と私は考える。

啄木が歌っているではないか。

快く我に働け仕事あれ

それを為遂げて死ななと思ふ

おわりに

如上の叙述に当って、私は禪宗が、仏教

の真意を伝えた旨を述べた。本浄土宗内においては、少なからず、これに異説があると思う。

しかしながら、私は禪宗は、仏教の哲学的真義を伝えたものであって、その哲理を理解し得るものは限られたインテリたちだけに過ぎず、一般民衆はその埒外に置かれたもの、と考える。

そしてこの埒外におかれた一般民衆にも、仏教の真に意図するところを「実践」せしむべく、法然上人の開明せられたところのものが外ならぬ「南無阿弥陀仏」であろう、と考える。

「南無阿弥陀仏」を唱名している限り、彼らは、共同社会に背反するような、いわゆる「悪事」を為し得ないであろう。そしてその「悪事」をせずして彼らの所与の環境に生きつつ、登山・盆栽・碁将棋・麻雀等々、その好むところに従いつつ、その一生を終らせようとするのが、法然上人の顕明せられたところではなかったか、と私は考える。

しかも一般庶民たちは、特に封建時代に

おいては、とかく貧困生活を強いられていたもので、ともすれば眼前の小利に引かれやすく、思わずして「悪道」に陥りやすかった。

故に「南無阿弥陀仏」は、ただ時々、或は一日一度だけ唱名すればよかったのでは、決してない。始終唱名することが不可欠であった。

「念仏百万遍」を称せられる所以である。
(五四・一・一稿)



◇ “浄土句集” 欄へ!! ◇

ハガキ一葉に二、三句ずつお書き下さい。一人でも多くの俳友をお誘い下さい。まして、たくさんの方の投句をして下さい。

投稿先

〒812 福岡市博多区中呉服町10-14

正定寺 一田 牛畝先生宛

浄土句集

一田牛畝選

しても、その間に仕事を片付けているうちにとうとう夜なべにもなる。

京都 安藤 寛
寒椿あまぐさの来てゐる日和かな

東京 栗原やえ子
秋高し船を遙かに野点かな

福岡 服部 光代
冬ぬくくいつも笑顔の老和尚

福岡 江上 樺村
提灯で手をぬくめつつ寒念仏

長野 原 幽遊
茶の花の垣根ゆかしき古利かな

福岡 高良 慈風
難聴の妻に手言葉年用意

山形 松田 允子
寒鴉いづなにときり天仰ぐ

福岡 上滝津弥音

五重会ごじゆうえの結縁けつえんよりの年賀状

評 五重会ごじゆうえは浄土宗の肝要の中の一的大事

なことを相伝する伝法で、その結縁でこの世も、次の世も同行となることの出来た人から賀状が来たのであるから、心のつながりが更に強くなった思いならん。

広島 香月てい子

初釜の正座となりて身もそぞろ

評 次客ならとも角、正座ともなれば、お

香の匂におひに松風の音をききつつなんとも言ひ得ぬ氣持になつて居られるらしい。

東京 原口 敬子

紅白の綱あたらしく除夜の鐘

評 撞木しづもの紅白の綱も新らしく替えられて

みんな集つて来た。今はもう除夜の鐘を撞くばかりで顔は張切っている。

東京 真野よし子

蕎麦そば白く秩父の裾野たもと黄昏たふしがるる

評 裾野は一面蕎麦畑である、黄昏がれて

いるのに蕎麦の花は白々と昏れ残っているのは雄大である。

東京 田中 秀代

二三日ふたみっか旅する前の夜なべかな

評 女は色々忙しい、ちよつと旅するに

山形 松田 光啓

ベーターベン聴き寛^{くろみ}ひて寝正月

福岡 荒牧 還愚
歳末の募金を終えし安堵かな

白白白一色雪の白樺湖

福岡 永江 隆子

福岡 植藤 みきを

軋^{うた}た寝の朝を迎えし置炬燵

東京 猪瀬 幸子
錫^{しやく}杖^{よう}を掛けし板碑や草紅葉

福岡 国友 星畝
校庭に高く積上げ飾焚く

東京 新井 新生

畦道に倒れしままの案山子かな

東京 島居 千代
木の実落つ音の静けき坊泊り

福岡 前田 秀峰
柿をむきながら話のはずみつつ

東京 阪入 等達

傾^{かたむ}きし案山子残れる分譲地

東京 阪入 志津枝
山芒銀波起して風渡る

福岡 新森 耕春
咳こめば大きな涙こぼれけり

東京 星野 小登

一人居に馴れて爪引く秋の夜

東京 栗原とも子
四五枝の萩を手折りて供へけり

福岡 行正 明弘
臨月の身をいたわりつ日向ぼこ

群馬 島津 か寿

朝の膳思はぬ香り露の聲^{こゑ}

東京 末常てる子
誓文弘母の思出胸に秘め

福岡 釈河野ねはん
水仙の咲き初め弥陀の供葬に剪る

三重 森 静枝

進学の子に着せんとて毛糸編む

東京 小笠原さち子
落葉焚く煙ただよひ人恋し

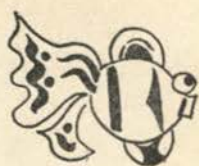
開口に春の風邪記び高座僧 一田 牛畝
新会員のご紹介を広くお願い申し上げます。

福岡 原 敬二郎

弘毅忌や供養ごころに遺墨掛く

大分 丹羽 難中
新しき石鹼タオル初湯かな

法然上人讃仰会



信仰への道

『無量寿経』に説かれていること(四)

吉村孝

八相の内、一の受胎から七の転法輪までは前号に書きましたので今回は八の入涅槃に入りま

す。滅度を示現すれども、拯済すること極まりなく、諸漏を消除して、諸の徳本を植え、功徳を具足せしむること微妙にして量り難し(滅度は涅槃・入滅のことで、釈尊の場合には八十歳でなくなれたこと、衆生を極まりなく救うこと、諸の煩惱を消滅すること、悟りの成果をもたらす本となる所の善い徳をしかりと身に着けること、仏道を修行して得た利益を満足な状態まで努力すること、釈尊が涅槃の時には最も円熟した説法と実践ができましたので八の入涅槃では衆生救済の総てが書いてあります。従って最後にあります微妙にして量り難しの意味は細かい所に重要な意味や味が含まれているので簡単には計り知ることができないということです)。

八相はここで終っておりませんが、釈尊は經典の中に度少なからず涅槃に入るといふことを書いておりますので、釈尊の説く涅槃に就いて少し書いて見ましょう。

入涅槃の所に滅度を示現して衆生を救済することは不合理のように思われますが、滅度の意義の中に方便があります。『法華経』の如来寿量品に、「然るに今、実の滅度に非ざれども、而も便ち唱えて、当に滅度を取るべし」と言う。如来是の方便を以て、衆生を教化す。所以は何ん。若し仏、久しく世に住せば、薄徳の人は善根を種えず。貧窮下賤にして、五欲に貧著し、憶想妄見の網の中に入りなん。若し如来、常に在って滅せずと見ば、便ち憍態を起こして厭怠を懷き、難遭の想い・恭敬の心を生ずること能わず」とあります。

しかしながら今は本当の滅度ではないけれども、それにも拘わらず滅度すると説いています。この形が方便であって、如来はこのような方法を以て衆生を教化しています。

その理由は、若しも仏が永久にこの世に住しているとしたら、普通の人は何時でも教えを聴くことができると思つて、徳の少ない人は教えを求めようとしません。それ故にその人の心はいつも貧しく賤しいものであります。五体の欲望に執著して小さな自己を中心に考えて他人の事を少しも考えない憶想妄見という間違つた中に落ち込んでしまします。

又、若し如来がこの世の中に永久に在住して入滅しないものだとして世間の人が思えば、わがままな心持ちを起し、厭きてきて、仏には中々遭えないと考へたり、敬い憚んで仏の教えを大事に聴こうという心持ちを起すことができません。

この方便としての入滅は經典の多くの所に、殊に『法華經』には沢山見られます。『無量壽經』に説いてある入涅槃も入滅のことですから、これも方便であります。

涅槃には有余涅槃と無余涅槃と二つあります。有余涅槃

は一切の煩惱から解脱した不生不滅の高い境地のことですが煩惱から解脱してもこの身と心が残っている限りは、なお束縛・不自由・不満が生じますから完全とはいえません。有余とは少しは迷いが残っているということです。無余涅槃は灰身滅智で身体が灰になって智が滅した時に終局の涅槃の境界に至るということでもあります。身心の存在する限り、完全な涅槃はないということです。

ここで考えられることは、釈迦仏法は釈尊が仏の智慧を会得してからの説法で身心の健康な時ですからこれは有余涅槃で、多少の束縛・不自由・不満が生じるかも知れない時の説法であるわけです。經典に六波羅蜜・菩薩修行の骨子、修行之終つていなくても法を説くことができる、又他の人を悟りの境地へ彼岸へに度すことができる、と書いてあるのもその為であります。

衆生を救済すること極まりなく、又、諸の煩惱を消滅する、又、諸の善い徳を身に着ける、功徳を具足させること、これらの諸の事は微妙で計り知ることはできないということと八相は結ばれております。

これに続きまして釈尊は諸菩薩の自利・利他の実践を

明らかに次のように説いてあります。

諸仏の國に遊びて、普く道教を現じ、その修する所の行は、清淨にして穢なし（諸仏の國を歩いて、仏道の教えを説き、その修行する所は、清淨にして穢がない）。

譬えば、幻師の、諸の異像を現するに、男となし女となして、変ぜざる所無く、本学明了にして、意の所為に在るがごとし（たとえば幻術師が、色々の異なった姿を写し出す時に、男を写し又女を写して、常に變化させて、幻術の學問を極めて、思ひのままに變化し現わすことができるようなものです）。

此の諸の菩薩も、亦復是の如し（この諸の菩薩も亦この幻師のようなものであります）。

一切の法を學びて、貫綜纒練し、所住安諦にして、化を致さざることなし（一切の佛法を學んで、衆生救済の法を詳しく學び鍛練し、學び得た救済の法が心にすっかり會得されて動揺せずに多くの衆生を救済しました）。

無数の仏土に、皆悉く普く現じて、未だ曾て慢恣せず、衆生を慰傷す（到る所の信者に皆悉く姿を示して行い、今までに高ぶった気ままな事をせずに、衆生を憐れみいたみました）。

是の如きの法の、一切を具足す（このような教えの一切が具わっています）。

菩薩は經典の要妙を究暢し、名稱は普く至りて、十方を導御す（菩薩は經典の精髄を究め尽している、八精髄は物事の一番勝れた重要な所、修行者の名は広く知れ渡り諸の衆生を導き教化しました）。

無量の諸仏は、みな共に護念したもう（諸仏はみな護つて下さる）。

仏の所住は皆已に住することを得、大聖の所立は、而も皆已に立す（仏が禪定に於て修める慈悲・平等の実踐は皆會得しているし、釈尊の清らかな行ないの実踐も皆すでに會得しています）。

如來の導化は、各よく宣布して、諸の菩薩の爲に大師と作り、甚深の禪・慧を以て衆人を開導す（如來の教化はよく広まり多くの菩薩の爲に大師匠となっています、非常に奥深い安らぎや仏の悟りを以て衆生を仏道に教へ導いています）。

諸の法性に通じ、衆生の相に達し、諸國を明了せるがゆえなり（この導きは真理の本質に通じ、衆生の状態にも通じているが、それはこのように衆生を導くことができるのは諸國を巡つて衆生の状態を明らかに理解できた為であります）。

諸仏を供養するに、その身を化現すること、猶電光の如し（諸仏に感謝するのにその態度を変えるに電光の如くに鮮かである）。

善く無畏の網を学び、幻化の法を曉らかに了る（説法に當って畏れる所のない自信の教を學んで、總てのものは実体なく固定した本性もないというその理法を確實に悟っている）。

魔の網を壊裂して、諸の纏縛を解く（煩惱の障りを網に譬えたもので、その網をずたずたに裂いて諸の煩惱を解き離します）。

声聞・緣覺の地を超越して、空・無相・無願の三昧を得たり（仏の説く声を聞いて修行する声聞や十二因縁を学び修行した緣覺の境界を超越して空三昧・無相三昧・無願三昧を得たということで、三昧は何ものかに心を集中することによって安定した状態に入ること、總ての事象は実体なく空であることと觀察することが空三昧で、ものの差別の相を離れることが無相三昧で、願い求める思いを捨てることが無願三昧で、この三つの三昧を得たということです）。

善く方便を立て、三乗を顯示し、この中と下に於て、滅度を現すれども、また所作なく、また所有なし（人を

真実の教えに導く為に假の手段を以て、三乗即ち声聞の教え、緣覺の教え、菩薩の教えの三つを顯して、中の教えの緣覺と下の教えの声聞に於ては積尊は滅度を方便として現わしているけれども、實際にそこには何も現われず積尊に變りはありません）。

不起・不滅にして、平等の法を得たり（總てのものは自然に生ずるものではなく又自然に滅してしまふものでもなく、共に縁によつて生じ縁によつて滅するという、因と縁による平等な真理を得ることができました）。

無量の總持、百千の三昧、諸根智慧を具足し成就す（總持は善いことを永く持ち統けて失わず悪は起さないように遮ること、三昧は心を一事に集注して他念のないこと、諸根は目・耳・鼻・舌・身の五つの作用、智慧はこの場合は弁才の智の意で諸根を識別して説法すること、などを皆具えて完成しています）。

広普寂定をもちて、深く菩薩の法蔵に入り、仏の華嚴三昧を得て、一切の經典を宣暢し演説す（広普寂定は菩薩が第九地という高い位の修行を積んで無量の教えを説く掘り所となる禪定が広普寂定で、菩薩が學ぶべき經典が菩薩の法蔵で、仏の華嚴三昧は広普寂定の別名で、この文意は、高度の修

行を積んだ菩薩が更に深く教えを学び、一切の經典を演説することができるといふことです。

深き定の門に住して、悉く現在の無量の諸仏を親みたてまつること、一念の頃あいだに、周徧しやうへんせざることなし（定は

心が一つ所に止まって動かないことで、その心の安定に止まって修行し仏の心を觀察し、一念の間に広く仏を見ることができ
ます）。

（つづく）

◆年会費値上げのお願い◆

◎新年会費 二、五〇〇円

〔昭和五十四年四月より実施―
『浄土』四十五巻・四月号以降〕

諸物価の高騰と諸般の事情により、しばらく頑張っていました当法然上人鑽仰会の会費を、従来の一年分二、〇〇〇円から、表掲の一年分二、五〇〇円の年会費に値上げさせていただきます。新会費を実施するのは、一応本年昭和五十四年の四月『浄土』四十五巻、四月号）以降からいたします。諸種の便宜をはかり、充分に意を尽してことに当るつもりです。どうか会員の皆様の暖かいご配慮とご援助をくれぐれも宜しくお願い申し上げます。

法然上人鑽仰会



念佛ひじり三国志

(平九)

—法然とゆづる人々—

寺内大吉

挿絵 松濤達文画

一

京都から鎌倉へ、この四百キロほどの距離は当時の交通事情から甚だ遠隔であった。ことに將軍頼朝の死によって、また嗣子頼家までが滅ぼされるに至り、京都では関東武士団の内情が容易に把握出来なくなった。源平合戦で功績のあった有力な御家人衆が次々に除かれてゆくのである。いったい誰が主導権を握っているのだろうか。

京都の公卿社会は過密な情報網で構成されている。彼らの政治活動とは、まず人間接触であり、続いて言論操

作である。

ところが武士団のモラルは寡黙である。沈黙のなかで行動する。行動を予見したり、後から裏付ける言論は絶無に近い。人間関係にしても「意気投合」が主体となるから、第三者からは容易に覗き得ない。

京都側は、乏しい資料記録から武士団の勢力分布を描いてみるしかなかった。

その資料記録だが、鎌倉幕府は毎年の正月、梔飯（おぼん）という行事をする習慣があった。治承五年（一一八二）頼朝が挙兵した最初の正月元日頼朝に一碗の飯を献じた故事をそのまま踏襲してきたものである。治承五

年は千葉常胤が筆頭で、彼が上総の大軍を引きつれて頼朝の軍營に参じたことによるのであろう。

頼朝の在世中は、おおむね元日が千葉常胤、二日が三浦義澄、三日が小山朝政、五日が宇都宮朝綱、と前線で働く武将群で占められていた。

頼朝が死んだあとの正治二年の記録は元日が北条時政、二日常胤、三日三浦義澄、四日が大江山、五日八田知家、六日大内惟義、七日小山朝政、八日結城朝光、と北条家が筆頭の地位を占める。

しかし、この正治二年は正月二十三日に三浦義澄が死に、幾ばくもなく、梶原景時が殺され、さらに三月二十四日には千葉常胤も死んだ。

京都側はこれで北条時政の独裁体制が確立したと読んだ。この一族と、支援する御家人は念仏信仰で結束した武士団たちであらう、とも判断した。

頼朝が死んで数ヵ月後、後嗣の將軍頼家は「女狂い」で政治をかえりみようともしなかった。すなわち寵臣安達盛長の愛妾に横恋慕し、盛長を強盗討伐のためと称して三河国へ派遣し、その留守に愛妾をさらったのである。

前号のあらすじ

専修念仏教団の隆盛に伴って、南都北嶺からの反発も厳しさを増してきている。明遍僧都は法然上人の思想やその人格に魅かれたながらも、鋭い政治家の眼で流動的な時局の変転を見定めようとしていた。比叡山が専修念仏を弾劾し、これに対処して法然上人が過激な門弟の言動を戒めるために著わされた『七箇条制誡』ではあったが、成覚房幸西や安楽房蓮西ら急進的な念仏じり達は逆に「専修」の結束を固める意図をもって『七箇条制誡』の交名簿を作ってしまった。

明遍は甥の聖覚法印や法本房行空に会って、『七箇条制誡』周辺の話を聞くうちに、急進的な念仏じり達の構想を知るに至る。専修念仏によって天下を制する、幸西が「専修」のブレンだとすれば、夢想家の絵空事とたたづけてしまう訳にはいかない。明遍の心中は複雑に揺れ動いた。

この事件が口火になって御家人武士団は大分裂をおこしかけた。結城朝光はそんな武将たちを集め、「忠臣は二君にまみえず」と頼朝の追悼をこめて一万遍の称名念仏を唱和した、と「吾妻鏡」は書いている。

幕下將軍(頼朝)ノ奉為ニ人別一万返ノ弥陀名号ヲ
傍輩等ニ励ム。オノオノコソリテコレヲ唱エタツ
マル

とある。

この念仏結集が、じきに「二君にまみえず」とは現將軍頼家を否定するの、と結城七郎をなじった梶原景時を断絶する連署状に発展する。武将の名が六十六人に及んだ。

頼家に愛妾をさらわれた安達盛長もまじっている。「入道蓮西」と称している。

結城七郎朝光は頼朝の乳母だった寒河尼が小山政光との間で生んだ子である。ちなみに寒河尼の兄が宇都宮朝綱である。

宇都宮朝綱は重阿弥陀という念仏信者で、その孫（子の成綱に夭折）に実信房蓮生の頼綱や信生房の朝業がいる。彼らはどちらも法然の弟子で、例の嘉祿（一二二七）の法難時、比叡山の僧兵が法然の遺骸をアバいて鴨川に流そうと企てたとき、弟子たちが嵯峨へ移す警固の役目をつとめた。四十八巻伝はこの兄弟のほか、千葉六郎大夫（入道法阿弥陀）渋谷七郎（入道道遍）頼宮兵衛（入道西仏）らの名を列挙する。千葉、渋谷もまた有力な鎌倉御家人である。

後鳥羽院政による独裁体制が確立した京都政権は、北

条一族を軸とした鎌倉武士団の結束がどこまで強固であるかを、しばらく傍観する。

平賀武蔵守朝雅が上洛したのは建仁三年（一二一三）の十月である。京都警固職としてである。西国に所領ある者は、その郎党を朝雅輩下にさし出せ、という命令も出た。近ごろ比叡山の僧兵が洛中を荒している知らせが鎌倉へ届いたからであろう。

現に朝雅が到着した直後、

己ニ官軍堂衆ト合戦。石弩入乱発、矢下ルコト雨ノ如シ。疲兵創痛シ、多ク敗亡ス云々……終夜武士等多ク京ニ入ル

と、藤原定家は日記「明月記」の十月十六日に書きとめている。

そのあと衆徒乱暴の記事がないのは警備が鎌倉武士たちによって強化されたためであろう。

ところが朝雅が院に参内を願い出ると、差し止めを喰う。「面目ニ非ザル由、内々申サル」（「明月記」、十一月二十七日）と軽くあしらわれている。定家は高位の公卿で

はないが歌道で後鳥羽院に近かったから、じかに洩らされたにちがいない。

しかし年が明けた建仁四年正月二十一日には「昨日武蔵守朝雅参入シ、釣殿ニ坐ス」とあって院内事情の変化を伝え、翌二十二日には「朝雅、殿上人ノ座ニ在リ」となる。

この平賀朝雅は鎌倉では最右翼に列する「毛並み」の貴公子である。頼朝の乳母だった比企局の娘で、一度伊東祐清に嫁したが、後に平賀義信の妻となった女性の息子で幼いときから頼朝の聲に入籍している。長じて北条時政が後妻牧ノ方との間でもうけた娘を妻にもらった。二代將軍頼家の御台所も比企局の孫娘だから血閥の中核を占める男である。

その朝雅の参内を軽くあしらったのである。この時点における後鳥羽院政の鎌倉に対する態度がうかがえるであらう。

朝雅が殿上へ出入りしはじめて幾日も過ぎぬ正月末、京都へ怪情報が舞いこんだ。定家は「明月記」にこうしるす。

関東乱逆アリ、時政、庄司次郎ノ為ニ敗ラレ、山中ニ匿ル。広元己ニ誅ニ伏ス。コノ事ニヨリ広元ノ縁者等騒動、京中迷惑シ、誰物ヲ運ブト云々。

庄司次郎が乱をおこし、北条時政は戦いに負けて山中に逃げこんだ。大江広元はすでに殺され京都の留守宅は大騒ぎになった、というのである。

庄司次郎とは畠山二郎重忠のことである。一谷の合戦で、ひよどり越えの嶮崖を馬を背負って駆けおりたという伝説上の人物だ。文治三年（一一八九）には領地の問題で大神宮の代官から訴えられ、千葉新介胤正の家に預けられた。その七日間、弁明らしきことはおろか一語も発しようとはせず、また米一粒も食べなかった。やがて大神宮の訴えは捏造であったことが判明し重忠は許された。頑固者の多い鎌倉武士のなかでも重忠は超ウルトラに属する男だった。

あの庄司次郎の叛乱なら、と京都側は情報をみんな信じこんだ。定家は左金吾朝雅の宿所へ出かけていって、彼自身の口から聞きただした。「殊ニ申ス事ナシ」と一笑に付されている。

＜藤原定家像＞



まさにデマゴグだったわけだが、鎌倉では「毛」ほどの噂も立っていない。このデマの発信源はどこだったのだろうか。

不審なのは藤原定家が「明月記」に書きつけたそのあとの文章である。関東兵乱の報を得て朝雅に会って一笑に付されたあと、定家は御所へ参内した。御所では陰陽師を招いてこの事件を占わせた。神馬も立てた。

全ク別事ナシ云々。天狗ノナス所カ

と定家は結んでいる。

デマがひろがった同じ日、早くも陰陽師が「別事ナシ」と断言しているのである。「天狗ノナス所カ」とは、九条兼実がしばしば日記「玉葉」で後白河法皇を呼びならわした表現だ。定家は後鳥羽上皇をその天狗になぞらえたのであろうか。

二

後鳥羽院の平賀朝雅への態度が月をかさねることに変貌してゆく。初めて昇殿を許されたころは「上北面ノ体

カ」と、つまり禁裏守護の北面武士の上位者という体裁としてか、自分を納得させていた藤原定家も足しげく「左金吾邸」を訪れるようになる。鎌倉武家政権の代表とみたのであろう。

同じ年の三月、伊勢で平氏の残党が叛乱した。

「吾妻鏡」三月九日は、武蔵守朝雅の飛脚到着を報ずる。守護人山内経俊はすでに逃亡してしまい、賊徒は鈴鹿ノ関八峯山の街道を占領、東西の道路が切断されたという。追討令を朝雅に下した。

しかし二十九日の項では、伊勢伊賀平氏謀叛のこと、すこぶる御不審なきにあらず、ということになって、京畿の御家人に朝雅と行動を共にし、彼の動きを監視せよ、と使者を上洛させている。

この件では、藤原定家も首をかしげる。「明月記」は三月二十一、二の両日でふれて、

伊勢謀反の者噉々ノ由、ソノ聞エアリ。ソノ勢千人ニ及ブト云々。

密々河原ニ出デ、追討使ヲ見ル。二百騎バカリ発向ス。ソノ勢幾バクナラズ。

二百騎で千人の賊徒を討伐。定家の情報（賊徒の数）も巷説がもとなのでアテにはならぬが、この叛乱に鎌倉の首脳と同じ角度から疑念を提起しているのも面白い。これも天狗の所業であったか。

とにかく平賀朝雅は賊徒を一掃する。鈴鹿の峻嶒を賊徒におさえられていたので合戦も意の如くならなかったが、美濃国へ迂回し伊勢へはいり背後から襲って覆滅した、と鎌倉へ報告している。

五月十日には前任者の山内経俊を罷免して朝雅が伊勢国の守護職に任ぜられた。十一月一日には朝廷からも正式に官位を与えられた。京都における平賀朝雅の地位はいよいよ重いものになった。

この年も秋路へ踏みこんだころ、住蓮は安楽房遊西と連れ立って舟で淀川を下った。神崎の舟着き場から二里ばかり山へはいった温泉宿へ出かけるのである。

湯治、遊山ではない。この湯山の奥で六時礼讃の興行が三日三晩にわたって結講されるのだ。湯山の奥には安楽房の山荘があった。

安楽房の、と言っても彼自身の所有ではない。祖父中原師茂のもので、尼になった祖母が住んでいた。「明月

「記」によれば藤原定家も翌夏（元久二年七月）そこへ出かける。定家は「上人ノ屋」と呼んでいる。寺というほどではないが温泉宿を兼ねた精舎だったのであろう。「師茂ノ妻尼数多ノ人勢ヲ募ルト云々。ヨツテ湯ヲ取り寄セテ浴シ、ソノ屋ニハ向ワズ」と、第一夜は何やら集りがあるらしいので別の宿に泊る。しかし第二夜は大雨で「湯ヲ運ブ能ワズ。ヨツテカノ尼公ニ請イ受ケ之ニ渡ル」のであった。第三日目は「音博士師行来談ス（今日下向、母ヲ相具ス）」とあり、安楽房の兄か弟とも会っている。あるいは安楽房本人だったかも知れない。

「鎌倉へ出かけていたそうな」

住蓮は舟の中で訊いた。

「うむ、二十日ばかりな。諸檀越をまわってきた」

「金光房に会ったか」

「殆んど一緒に歩いた。あの僧、こまめに檀越の間をまわっている」

金光房は筑後の人で、十六才で剃髪、三十二才には石垣山観音寺の別当となった。以後観音寺伽藍修復に専念した。四十七才のころ観音寺所領の問題で訴訟になり、鎌倉へやってきた。たまたま来合わせていた安楽房遵西

から「選択集」の講説を聞いて翻然念仏者となったのである。

金光房は伝に久寿元年（一一五四）とあるから四十七歳と言えは建仁元年あたりになる。安楽や住蓮がエネルギッシュに鎌倉武士の間を布教して歩いていたころである。

念仏ひじりとなった金光房は関東から東北へかけて教化に専念していたはずである。

ちなみに法然の弟子親盛法師が「お師匠様が亡くなったあと浄土の法門について疑念が生じたとき、誰にたずねらよろしいでしょうか」と問いただと法然は即座に「聖光房か金光房がくわしく所存を知っている」と答えた、という逸話が残っているほどの念仏者であった。

この逸話からも判るように金光房はしばしば京都へもやってきて、法然に面受している。

「ところで、ようやく坊門の姫君が鎌倉へお興入れがほんきまりになったぞ」

と、安楽房は言った。

彼自身が阿波局の懇請によって根まわしをしてきた縁談である。

「二品ノ尼(政子)は足利の息女を望んでいたという話だ
が」

「それは事実らしい。あのお方は、有名な都人嫌いだからな」

「大姫の入内などでこりたのだろう。ほんきまりにした
推進者は誰なのかな。もはや阿波局ではあるまい」

「うむ、そのあたりのこと、京へ帰る道中で鎌倉の武家
輩から聞いた」

「武家輩と一緒に旅だったのか」

「坊門の姫君をお迎えのために上洛してきた連中だ」

「誰たちが来たのか」

「左馬権助を筆頭にな……」

左馬権助は北条時政が牧ノ方に生ませた最愛の息子政範である。以下御台所お迎えの面々は結城朝光、畠山重保、千葉常秀、八田知尚、和田三郎、土肥惟平など若い御家人たちであった。結城や八田など安楽房とはじっこの念仏信者がふくまれていた。

坊門の姫君を鎌倉將軍実朝へ興入れさせる当初の推進者は阿波局だった。坊門家自身も後鳥羽院の暴走を嫌い、鎌倉と手を結ぶことを願った。

阿波局は北条政子の実妹であり、夫の阿野全成は將軍頼朝の唯一人生き残っている弟である。

昨年五月、突如として阿野全成が逮捕された。駿河国で武田信光の手にかかり鎌倉へ引かれてきたのである。

阿野全成は二月ごろ京都を逐電し、駿河国に潜伏した、ということになっている。なぜなら全成の逮捕で將軍頼家が母の北条政子に阿波局の処分をも迫ったとき「彼女は二月ごろ逐電した夫と一切音信を持っていないから今度の謀叛とは無関係だ」と強弁している。

それにしても阿野全成の謀叛とは、どんな内容だったのか。駿河への逐電にしても「身が危険だから逃げて来い」と誘われたのかも知れない。

駿河国は北条氏にとって暗殺の「お刈り場」的土地だったとも言える。さらに梶原景時一族も此処へ誘い出され、滅されている。

武田信義の所領だった。しかし將軍頼朝に召し上げられ、その死後は北条氏の直割領となった。武田信光ら旧武田一族は代官として土地にへばりつき、北条氏に忠勤を励んでいたであろう。

阿野全成はいったん宇都宮頼業に身柄を預けられた

＜上人ノ屋の湯場＞



が、やがて常陸へ送られ八田知家の手で殺された。建仁三年の六月二十三日である。

その知家の息子が御台所お迎えのために上洛しているのである。

「公卿もそうじゃが武家の世界も判らんとくろが多い」

「それで、推進者は……左馬権助が筆頭じやから遠州公（北条時政）ご夫婦か」

「ということになるであらうな」

ただし、安楽房の言葉には、ある種の余韻がふくまれていた。

その余韻の内容を、住蓮は湯山の「上人ノ屋」に着いた深夜聞かされることになる。

三

祖父師茂の未亡人と言っても安楽房越西の祖母はまだ若かった。もちろん父師秀を生んだ人ではない。中年女性の艶脂のようなものが肌に泌み残っていた。それと、「上人ノ屋」の湯の性もよほど良質だったのかも知れない。十数人の男女が集って六時礼讀の稽古に熱中していた。仁和寺御所から来た女房も混じっていた。

「あなたとお局との噂がもっぱらですよ」

と、祖母は演習の合い間に冷やかすのであった。お局とは仁和寺にいる坊門局のことだ。こんど鎌倉へゆく御台所の姉である。

「そんなことが院のお耳にはいったら、たちまちこれですよ」

と、安楽房は首に手刀を置いてみせた。

たしかにお互い歩み寄ろうとする慕情はあった。だが、そんな生き臭さいもの嫌って法然のもとへ走った安楽房である。胸の内側にだけとどめている。

天人丈夫衆 恭敬繞瞻仰

雨天楽華衣 妙香等供養

願共諸衆生 往生安樂国

後夜礼讀をうたう安楽房の音声は、ひときわ訝えわたった。

天人丈夫たちは恭敬し、めぐりめぐって阿弥陀仏を仰ぎつつ、雨の音にも似た楽の響きや眼を奪う花ごろも、妙な香も供えて、もろともに極楽国に往生をしよう。

そんな意味であらうか。

講衆は酔いしれている。あとは彼らの独習にまかせて、安楽と住蓮とは「上人ノ屋」の奥へ渡った。

岩窟まで仮り橋が渡され、その奥にこんこんと熱湯が湧出する湯壺があった。谷水と適温に混ぜ合う岩湯へ二人は裸身を沈めた。

「さっきの話だが、こんどの坊門姫君の鎌倉下向。推進者は遠州公夫婦だが、未だ阿波局がからんでいる、とわしはみる」

安楽房は言い出すのであった。

目下の彼には、念仏や六時礼讀よりも東西間の政治の方が氣にかかるらしい。

「阿波局は完全に失脚したのであらうが……」

「完全ではない。現に生きている。息がある」

「というところ？」

「院との間の紐がつながれたまま鎌倉へ帰ったのではないだらうか」

「紐とは何だ。まさか院と阿波局の間に男女の結び付きがあるとても……」

「ない、とは限らぬぞ」

「あんな嬉桜を」

「いやいや。名うての好きものの院のことじゃ。そんな噂を小耳にはさんだこともある」

「全成法橋が生きているところか」

「もちろん、そうだ。全成法橋を謀叛を理由に殺した遠州公や二品の尼公がなぜ阿波局を斬れなかっただ」

「それは娘であり妹だからであらう」

「そんな甘いものではない。現に可愛い息子であり孫である左金吾將軍（頼家）を惨殺した彼らではないか。何で阿波局一人ぐらいが」

「それで、阿波局が未だ今度の入内からんでいたとしたら、どうなるのか」

住蓮には安楽房の「読み筋」へはいりこめないである。

「いや、わしにもわからぬ。しかし何かが起りそうな気がする。後鳥羽院の意を体した阿波局によって何かがな」

「なるほど」

「それと……わしら専修念仏の徒もうかうかはしておれんぞ」

「うむ」

「院の眼には鎌倉武士の一味のように映っているからだ」

「わしらは信仰だけで結ばれている。政治的な野望など毛頭ないわい」

純粹な住蓮は怒気をふくんで吐き棄てた。

「おぬしはそうでも他はわからぬ」

「他とは？」

「念仏ひじりにはさまざまな人間が集ってきている。現にわしみたいな男もな」

「おぬしが、どうだというのだ」

「この安楽房は天下を乗っ取るくらいの野望をいだいているかも知れんぞ」

安楽房はそこで詞々大笑した。彼の疳高い声が岩窟の天井にハジきかえり、ぶ気味な音響を作った。

たしかにこの男にはわからぬ面が幾つもある、と湯面を見つめながら住蓮は思った。

安楽房は先に湯からあがった。裸身を拭いている。貴族特有の白く、ふっくらとした裸身であった。三十三歳、いや四歳であらうか。少年のように美しく輝いた肌だ。

住蓮は肌黒いおのれの武骨い身体とひき比べずにはおれない。

こうして先般、署名をした専修念仏教団の人々にはさまざまな階層、人種が入り混じっているのだ。判然としているのは師の法然だけであって、お互いに腹の内は誰一人読みとおせないひじりたちばかりであった。

坊門姫君の鎌倉下向に何かがおこる、と安楽房は予言したが、現実には小さな事件が発生した。まさしく表面は小さな事件である。

姫君一行が京都を出立しようとする直前の十一月五日（元久元年——この年建仁四年を二月から元久と年号があらたまっている）筆頭の使節だった左馬権助の北条政範が突然死んだのである。

死因は、着京当時から（十一月三日）食当りで悩んでいたが、ついにこの日の夜陰子ノ刻に息を引き取ったという。

遠江左馬助、去ヌル五日、京都ニオイテ卒去ノ由、
飛脚到着ス。コレ遠州当時ノ寵物、牧ノ御方腹ノ
愛子ナリ。父母ノ悲嘆サラニ比ブベキモノナシ

「吾妻鏡」は、十一月十三日の項で書いている。死因に疑問はなかったであろうか。

さらに「吾妻鏡」は同月の二十日、政範に随侍して上洛した憧僕が鎌倉へ帰着し、政範の亡骸を東山へ埋葬した報告を紹介している。そしてこんな報告も併記する。

同四日、武藏前司朝雅ノ六角東洞院ノ第二オイテ
酒宴スルノ間、亭主ト畠山六郎重保ト諍論ノ儀アリ。
シカレドモ会合ノ輩コレヲ宥ムルニヨツテ無
為ニ退散シオワンヌ

平賀朝雅と畠山重保が口論をした、というのである。それも北条政範が死ぬ前夜のことである。二つの事件につながりがありそうにも思えない。しかもどちらも小さな事件である。旅先で十六才の少年が食当りで死んだ。京都守護代と使節が口論し、みんなが宥めたので丸くおさまった。それだけのことである。

だが、これから一年足らずの間に、小さな事件の関係者たちが次々と暗い運命へ追い落されてゆくのであった。

（つづく）

二 編集後記 二

○『浄土』誌は、本年をもつて四十五巻に突入した。それは昭和十年に、故真野正順博士らが法然上人讃仰会を起こされて、その月刊機関誌として出発して四十五年を閲したことになる。まさに雑誌『浄土』は、念仏信仰に生きる人たちの暖かい援助とやさしい配慮が、法然上人讃仰会を通して結ばれた、その信心の証しである。

○その弊会の創設以来の同人、佐藤良智博士が忽然として浄土にみまかれたのは、昨年の十一月二十六日のことであつた。ここ三年ほど病床にあられたとはいへ、この温容の大樹にはまだまだ私たちの側で指導をしてほしかった。それが私たちのような凡夫の隠さぬ願ひであつた。しかし、七十五歳の天寿はいかばかりもなく、年月の移り行きはまことは矢のごとく、まもなく百ヶ日の忌日を迎えようとする。『浄土』本号は、愚かなる私たちの哀しみの想いを

こめて、故佐藤博士の追悼のための誌面とした。それは、浄土信仰に生きる私たちが、故佐藤博士を浄土のみ仏として確認し、一向に念仏するために……。

○ところで昨年はまた弊会にもゆかりの深かった作家、一瀬直行先生が逝去された。十一月十四日、齢七十四歳ということであつた。先生の作品は、芥川賞候補になつた「隣家のひとびと」をはじめとして、浅草界隈の市井の人々の素朴な生活振りを描いて端然とした趣きがある。しかし晩年は、『隨筆浅草』などのような詩的な散文に、躍如たる面目を発揮しておられた。近刊では、『浅草走馬灯』（光風社刊）の珠玉隨筆集がある。一瀬先生のご冥福を心からお祈りしたい。

○春三月、今月は彼岸会の月である。四月からは本誌も、年会費を二五〇〇円に値上げするが、どうか宜しく御配慮願ひたい。

彼岸会や欣求浄土念仏す ゆう一
彼岸会や双手について老の杖 助二郎

「浄土」購読規定

会費一カ年 金二、〇〇〇円

(送料不要)

浄土 四十五巻 三月号

昭和十年五月二日
第三種郵便物認可

昭和五十四年二月二十五日 印刷
昭和五十四年三月 一日 発行

編集人 宮林 昭彦
発行人 佐藤 密雄
印刷人 関 二三男
印刷所 長谷川印刷株式会社

東京都千代田区飯田橋一―十一―六

発行所 法然上人讃仰会

電話東京二六二局五九四四番

〒103 振替東京八一八二一八七番

=好評発売中=

大正大学名誉教授 中村康隆 著

『宗 教 学 小 論 集』

— 天の饗宴と地上の饗宴 —

A 5 判 266頁 上製函入 定価 4,000 円

◎永年に渡り、宗教学、宗教社会学、仏教民俗学などの分野で研鑽を積んでこられた著者の広汎な学術論文集の待望の新刊。

発行 国書刊行会

〒 170

東京都豊島区巢鴨 3-5-18

振替（東京）5-6 5 2 0 9

■念仏信仰和訳宝典三部作■

『和 訳 法 然 上 人 選 択 集』村瀬秀雄訳著

B 6 判 387頁 上製函入 定価 2,500 円

『和 訳 善 導 大 師 観 經 四 帖 疏』村瀬秀雄訳著

B 6 判 584頁 上製函入 定価 3,500 円

『和 訳 浄 土 三 部 經』村瀬秀雄訳著

B 6 判 474頁 上製函入 定価 2,500 円

檀信徒への記念品、贈呈用に是非共ご利用下さい。

万人必読の和文聖典です。

発行 常 念 寺

〒 256

小田原市国府津 5-14-49

振 替（横浜）8 2 9 6

取扱い 法然上人鑽仰会

〒 102

東京都千代田区飯田橋 1-11-6

振 替（東京）8-8 2 1 8 7